

看護学生の子どもの健康に対する認識(1)

—小児看護学実習終了後の調査—

上山 和子

小児看護学

Nursing Students' Understanding of Children's Health (1)
—A Questionnaire Survey after Pediatric Nursing Practice—

Kazuko UYEYAMA
(2001年11月1日受理)

新カリキュラム後に小児看護学実習を終了した看護学生が、子どもの健康をどのように認識しているか自由記載回答で調査した。その結果、学生の子どもの健康を意味するものは、226件で、一人4.6件であった。その内容を分類すると27のサブカテゴリー、5カテゴリーが抽出された。カテゴリーは、「健康状態に関すること」「健康管理の方法」「小児期の特徴」「活動状態に関すること」「疾病の影響」が抽出された。また、その内容を健康の概念である身体的・精神的・社会的の3側面から分類すると身体的143件(63.3%)、精神的65件(28.7%)、社会的18件(8.0%)であった。

以上より、以下のことが言える。

- ① 学生は、子どもの健康について健康の概念である身体的・精神的・社会的の三側面から捉えているが、身体面からの捉え方が中心になっている。
- ② 学生は、健康な子どもを主体とする保育所実習、学校保健室実習により「健康管理の方法」について学習しており、ヘルスプロモーションの観点からも重要である。
- ③ 新カリキュラム後、本学の小児看護学実習では子どもの健康を育成する場の実習が多いため、健康状態に関する項目の中でもフィジカルアセスメントを活用した項目が少ない傾向にある。今後の課題として健康な子どもを育成する保育所実習においてもフィジカルアセスメントによる観察を意識して子どもの健康を捉えられるように実習指導を進めていく必要がある。

はじめに

少子高齢社会の到来をふまえ、その社会状況に対応するため、看護学のカリキュラムも平成9年に改正された。新カリキュラムの基本的考え方として6つ挙げられている¹⁾。その中でも健康につ

いては、「人々の健康を自然・社会・文化的環境とのダイナミックスな相互作用、心身相関等の観点から理解する能力を養う」「人々の健康上の問題を解決するため、科学的根拠に基づいた看護を実践できる基礎的能力を養う」「健康の保持増進、疾病予防と治療、リハビリテーション、ター

ミナルケア等、健康の状態に応じた看護を実践するための基礎的能力を養う」を挙げている。

このように人々の健康について看護のあらゆる面から総合的にとらえるように看護教育に提示している。そのため、看護教育において健康をどのようにとらえていくか重要である。

本学の小児看護学実習後の看護学生（以下、学生とする）の学習内容については第9回の日本小児看護学会で発表した²⁾。学生は主に小児看護の対象、小児看護の役割、発達期の特徴などについて学習している。その後カリキュラム改正に伴い小児看護学実習時間が減少したため、学習内容の統合化を図りやすいように小児看護学実習導入時のガイダンスで学生に小児看護学実習の学習構造を示し、実習目標の小児の健康問題を捉えるようにしている。

カリキュラム改正後の実習課題として安田ら³⁾は、「実習期間との関連で目標設定や到達目標等の検討が必要である」としている。実習期間の変更に伴い学生が、実習目標の小児の健康問題をどのようにとらえているか実態を調査し、評価していく必要がある。

そこで今回は、新カリキュラム後に小児看護学実習を終了した学生が、実際に子どもの健康をどのように捉えているか明らかにし、今後の小児看護学実習の課題について検討した。

1. 子どもの健康についての定義

健康の定義について世界保健機構（WHO）⁴⁾⁵⁾⁶⁾は、「健康とは身体的にも精神的にも、そして社会的にも完全に良好な状態（well being）であり、単に疾病や虚弱ではないということではない」としている。また、「このような健康を享受することは、すべての人間の基本的権利の一つである」としている。

さらに健康の捉え方として四つの健康観が示されている⁷⁾⁸⁾。①病気に対する健康として「病気がなければ健康であるとか身体の障害がなければ健康という概念」、②社会的役割遂行としての健康「社会基準に基づいた行動や役割を遂行できる能力を捉え、それが十分に発揮できる状態を健康と

いう概念」、③おかれている状態への適応状態としての健康、④生活の質からみた全人的健康の捉え方「基本的欲求の自己実現が達成されている状態でライフスタイルの個々の局面がよりよくコントロールされている全人的（ホリスティック）な健康状態とする考え方」また、「QOLに代表されるように身体的、心理的、社会的、倫理的にも満足できる、安寧な、幸福な、状態である。まさによく食べられ、よく眠れ、排泄に支障がなく、疼痛がなく、あっても苦痛にならず、心理的に安定し、社会生活において十分にその役割を果たすことができ、生きがいをもって充実した日々を送れること」ができる生き方の状態を示している。

そして、子どもの健康の定義については、「子どもの健全な発育は基本的重要性を有し、変化する全体的環境の中で調和して生活する能力は、このような発育に欠くことができないものである」⁹⁾としている。

田中¹⁰⁾は子どもの健康について「子どもは機嫌がよく、食欲も旺盛である。また、生き生きと活動し、楽しく遊ぶことができる。この活動や遊びは生活であり、それは、発育発達が基盤となって形成されている」としている。

そして、健康でないときは、「いろいろな症状、所見、状態がみられる。その状態が、子どもの成長に伴い変化が生じることも、子どもの健康を考えると十分に念頭におく必要がある」としている。

その考えの基にWHOの定義を小児に当てはめ、小児の特性である発育発達に基づく指標として

- ① それぞれの小児のもつ条件に応じて、順調な発育発達現象がみられること
- ② 各発育発達段階において可能な生活が支障なくおくれること
- ③ その生活が次の段階の発育発達を促すこと以上の3つを挙げている。

このように健康について形態的、機能的特徴だけでなく、子どもの成長・発達の理念をふまえた考え方を基にここでは、子どもの健康について捉えていく。

2. 研究目的

新カリキュラム後に小児看護学実習を終了した学生が、実際に子どもの健康をどのように捉えているか明らかにし、今後の小児看護学実習指導の課題を明確にする。

3. 研究方法

研究対象：平成12年度に小児看護学実習を受講した本学3年生57名

研究方法および分析方法：3年次の小児看護学実習終了後に学生の下承を得た上で子どもの健康についてどう認識しているか質問紙で調査した。記載方法はキーワードを5つ挙げてもらい自由記載回答とした。さらにキーワードを分類し、類型化した。また、キーワードを健康の概念である身体的・精神的・社会的の3側面から分類した。尚、キーワードについては、記載の多い学生の回答に偏らないため、キーワードの数を限定した。倫理的配慮として学生に学業成績には、関係しないことを説明した。

4. 本学の小児看護学実習の形態および小児看護学実習学習構造

1) 実習形態

本学の小児看護学実習は、3年次の前期から後期にかけて1グループ7～8人ずつで最初に健康な小児の発達と保育を学習する保育所実習を行い、引き続き健康障害をもつ児への看護を学習する病院実習に加え、夏休み直前に一斉に行う学校保健室実習の計2単位の実習を行っている。尚、小児看護学実習導入時のガイダンスで学生に小児看護学実習の学習構造を示している。(図.1)

2) 実習目的・目標

目的：小児の発達段階を理解し、健康な小児の養護と健康上の諸問題をもつ小児への看護実践を通し、各健康レベルの小児の健康問題をとらえる能力と態度を養う。

目標(1) 健康な小児の発達段階の特徴を知り、そ

の発達段階に応じた保育的働きかけを理解する。(主に保育所実習で)

(2) 各期の発達段階で健康障害をもつ児および家族との援助的人間関係を成立、発展させる能力と態度を養う。(主に病院実習で)

(3) 健康障害をもつ児および家族の看護の必要性を認識し、看護過程を展開する。(主に病院実習で)

(4) 健康障害をもつ児に基本的な保育および看護援助できる能力を習得する。(主に病院実習で)

(5) 小児の保健・医療・福祉・教育について理解し、小児の健康問題を幅広くとらえ、そこに携わる種々の職種を認識し、看護の役割と責任を自覚する。(主に病院実習・学校保健室実習の中で)

5. 結 果

回収人数は57人中49人(回収率86%)であった。

学生の子どもの健康に対する認識を意味するのは226件で、一人平均4.6件であった。その内容を分類すると27のサブカテゴリー、5カテゴリーが抽出された。カテゴリーは「健康状態に関すること」「健康管理の方法」「小児期の特徴」「活動状態に関すること」「疾病の影響」が抽出された。

カテゴリー別に頻度でみていくと「活動状態に関すること」72件(31.8%)、「健康状態に関すること」64件(28.3%)、「健康管理の方法」54件(23.9%)、「小児期の特徴」32件(14.2%)、「疾病の影響」4件(1.8%)であった。(図.2)

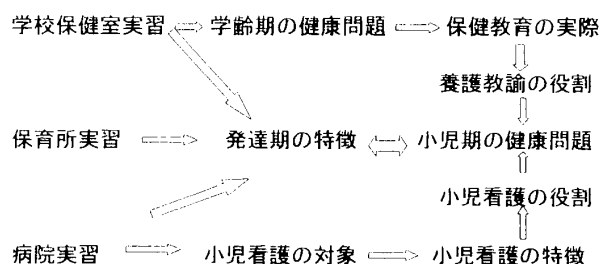


図1. 小児看護学実習の学習構造

以下「 」はカテゴリ、〈 〉はサブカテゴリ、《 》は記述を示す。

1) カテゴリ別の主なサブカテゴリ内容（サブカテゴリ数の多い順に示す）

(1) 健康状態に関すること

「健康状態に関すること」のサブカテゴリは〈状態が変化しやすい〉26件、〈病気に罹りやすい〉24件が最も多かった。〈状態が変化しやすい〉では《健康状態の変化が激しい》《すぐに状態が変わる》《疾病の進行も治癒も速い》などが記述されていた。〈病気に罹りやすい〉では《抵抗力が弱い》《外因に影響を受けやすい》《感染しやすい》などが記述されていた。次いで〈食欲がある〉6件、〈けがが多い〉4件、〈アレルギー疾患が多い〉2件などが抽出された。

(2) 健康管理の方法

「健康管理の方法」のサブカテゴリは〈親に管理されている〉21件が最も多く、《自己管理できない》《大人による管理が必要》《家族によって守られている》などが記述されていた。次いで〈機嫌で健康状態が分かる〉13件、〈細かい観察が必要〉7件、〈生活習慣の確立〉5件、〈食生活が重要〉4件、〈定期的な健康診断が必要〉3件などが抽出された。

(3) 小児期の特徴

「小児期の特徴」のサブカテゴリは〈成長・発達している〉17件が最も多く、《運動機能の発達》《日々の成長・発達》などが記述されていた。次いで〈親からの愛情を受けている〉5件、〈好奇心が強い〉4件、〈未熟である〉3件、〈月齢による差が大きい〉2件、〈年齢に応じた遊びや学習が必要〉1件などが抽出された。

(4) 活動状態に関すること

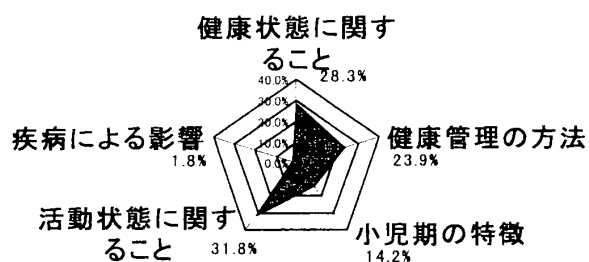


図2. 子どもの健康に対する認識の頻度

「活動状態に関すること」のサブカテゴリの上位項目は〈活発〉25件、〈笑顔〉18件、〈元気〉18件であった。〈活発〉では《活発に動きまわる》《活発な動作》、〈元気〉では、《元気に走り廻る》《元気である》、〈笑顔〉では《笑顔》《笑う》などが記述されており、動作や表情そのものを表す表現が多かった。次いで〈よく遊ぶ〉8件などが抽出された。

(5) 疾病による影響

「疾病による影響」のサブカテゴリは〈病気が成長・発達に影響する〉3件、〈家族への影響が大きい〉1件が抽出された。〈病気が成長・発達に影響する〉では、《病気が成長に直結する》《将来に影響しやすい》などが記述されていた。（表1）

2) 健康の概念である身体的・精神的・社会的3側面からの分類

健康の概念である身体的・精神的・社会的の3側面から分類すると身体的143件（63.3%）、精神的65件（28.7%）、社会的18件（8.0%）であった。（図3）

(1) 身体面のサブカテゴリ

身体的な面の主なサブカテゴリは、〈成長・発達している〉〈月齢による差が大きい〉〈病気が成長・発達に影響する〉などであった。

(2) 精神面のサブカテゴリ

精神的な面の主なサブカテゴリは、〈好奇心が強い〉〈笑顔〉〈活発〉〈元気〉などであった。

(3) 社会面のサブカテゴリ

社会的な面の主なサブカテゴリは、〈親からの愛情を受けている〉〈けんかをする〉〈年齢に応

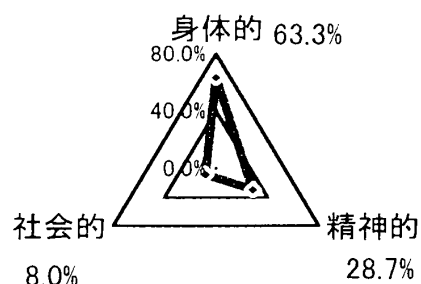


図3. 健康の3側面による子どもの健康に対する認識の分類

表1. 看護学生の子どもの健康に対する認識

カテゴリー	サブカテゴリー	カテゴリー	サブカテゴリー
健康状態に関すること 〈7〉(64)	状態が変化しやすい(26)	小児期の特徴〈6〉(32)	成長・発達している(17)
	病気に罹りやすい(24)		親からの愛情を受けている(5)
	食欲がある(6)		好奇心が強い(4)
	けがが多い(4)		未熟である(3)
	アレルギー疾患が多い(2)		月齢による差が大きい(2)
健康管理の方法〈7〉(54)	脱水になりやすい(1)	活動状態に関すること 〈5〉(72)	年齢に応じた遊びや学習が必要(1)
	顔色が良い(1)		活発(25)
	親に管理されている(21)		笑顔(18)
	機嫌で健康状態が分かる(13)		元気(18)
	細かい観察が必要(7)		よく遊ぶ(8)
	生活習慣の確立(5)		けんかをする(3)
	食生活が重要(4)		病気が成長・発達に影響する(3)
	定期的な健康診断が必要(3)		家族への影響が大きい(1)
	うがいの励行(1)	疾病による影響〈2〉(4)	

〈 〉 サブカテゴリー数 () 件数

じた遊びや学習が必要〉〈家族への影響が大きい〉などであった。

6. 考 察

1) 看護学生の子どもの健康に対する認識について

(1) カテゴリー別の子どもの健康に対する認識

学生は、子どもの健康について「健康状態に関すること」や「健康管理の方法」に関する項目だけでなく、子ども自身の「活動状態に関すること」を最も多く取り上げている。この中でも「活発」「元気」を最も多く挙げており、これは、子ども本来がもっている躍動的で活動的な面に注目しているためと考えられる。カリキュラムの改正とともに保育所実習を病院実習直前に行っており、健康な子どもの活動状態に実際に接し、運動面からの元気さを取り上げていると考える。

そして、保育所実習終了後に病院実習を行うために健康な子どもとの活動量の違いを認識したためと推察される。健康の概念において子どもの活動は日常生活の一部であり、学生の捉え方として上位に取り上げていることは、田中¹¹⁾が定義しているように日常生活の中で子どもの健康を捉えていくこととして重要な概念と言える。

第二に「小児期の特徴」では、保育所において各グループとも年齢別のクラスに分かれ実習を行っており、年齢の違いによる成長・発達過程を

知り、体験的に「成長・発達している」ことを学習していると考ええる。これは健康という概念だけでなく小児期の特徴として実感し、そのために最も多く取り上げていると推測される。

そして、健康な子どもは、日々年齢に応じた遊びや学習を行っており、遊びや学習に関する項目を少ないながらも必要であることを認識したと考える。

第三に「健康管理に関する方法」では、自己管理できない子どもの特徴をふまえ〈親により管理されている〉や自分自身で訴えることの出来ないため、〈細かい観察が必要〉などが挙げられたと考える。一方で生活習慣の確立や食生活が重要などは保育所実習や学校保健室実習で学習する内容から、子どもの健康にとって日々の生活管理から健康管理を進めていくことを認識していると推察される。

第四に「健康状態に関すること」では、〈状態が変化しやすい〉〈病気に罹りやすい〉の2項目について最も多く取り上げており、子どもの疾病経過の特徴や生理的特徴を捉えて挙げていると考える。これは、病院実習において急性期の患児を受け持つことが多いことと、保育所実習でも乳児のクラスでは1日の生活の中でも発熱などで状態が変化する子どもに接する機会も多い。そのためこのような項目が多かったと考える。

一方で、実際に子どもの健康状態を観察して挙げられるバイタルサインに関することや皮膚の状

態など全身状態を表す項目が少ない。つまり、子どもに接し観察などから挙げられる健康診査（フィジカルアセスメント）を活用した項目が少ない。これは集団保育の中では、子どもの動きや言動を中心に捉えており、病院実習では受け持ち制により個々に子どもと接しているが、疾病の経過より看護上の健康問題を捉えようとしているためと考える。

第五に「疾病による影響」では、子ども自身の成長・発達や家族も含めて子どもの健康が障害された時におよぼす影響について病院実習での体験から考えられている。しかし、子どもの健康については、健康障害をもつ児の認識が低く、あまり取り挙げなかったと考える。

(2) 健康の定義の身体的・精神的・社会的の三側面からの子どもの健康に対する認識

健康の定義の三側面で一番多いのは身体的側面である。この健康という言葉からまず認識するものとしてまず身体面に関する項目が多いと考える。子どもの成長・発達を中心に形態的・機能的な面を中心に挙げている。また、子どもの生理的特徴や疾病の特徴をふまえて健康状態そのものを示すものや健康管理の方法などが身体的な面で多かったと考える。このように子どもの健康を考えていく時、WHO も唱えているように学生は成長・発達の原則にそった考え方を認識していると推察される。

そして精神面では、表情や動きなど子どもが示す言動などの表現を中心に挙げられており、子どもが次々に興味を示す行動から好奇心が強いなどが挙げられている。これは、保育所実習で子どもと共に行動することにより、子どもの言動などから受け止めていると考える。しかし、全体的には健康の概念の中で精神面に関する項目は少ないと考える。

さらに社会面では、親や家族に関する項目や仲間関係を意味する項目が挙げられている。また、子ども自体が遊びや学習を通じて社会性を身につけていくことから健康を意味するものとして年齢に応じた遊びや学習の必要性を理解したためと推察される。これは、子どもにとって遊びは日常生活

における一部になっており、保育所での遊びを中心とした日常生活から、遊びを制限される病院実習での子どもの様子を知り、遊びへの援助の重要性を感じていると推測される。子ども同士や家族など周囲の大人との関係から、子どもの健康を捉えていくことは小児看護にとって基本となり、取り挙げ方は比較的少ないが認識していると推察される。

以上より、子どもの健康について学生は生活概念としての健康の三側面から統合して捉えることが出来ているが、健康という言葉から身体面が中心で精神面・社会面が少ない傾向にある。

2) 今後の小児看護学実習指導の課題

学生は子どもの健康について保育所実習や学校保健室実習など健康な子どもを主体とする実習での体験をもとに「健康管理の方法」について考えている。今回の新カリキュラムでの教育体制の拡大として「実習施設については、施設の規模ではなく、看護の質の面から規定するとともに、看護の場の拡大に対応した施設を活用できるようにするため」¹²⁾としている。このことから、看護の場の拡大として病院だけで行われている看護場面での体験だけでなく、健康な子どもの健康維持として健康管理を日常生活にどのように取り入れられているか体験的に学ぶ機会は、新しいカリキュラム後のねらいをふまえた学習ができていると考える。また、ヘルスプロモーションの観点から考えても重要な学びと言える。

一方で健康を障害している児に関する項目である「疾病による影響」や「健康状態に関すること」の中でも実際に観察して挙げられるフィジカルアセスメントに関する項目が少ない。これは小児看護学実習時間の減少に伴い病院実習時間が減少し、子どもの健康を育成する場としての実習施設での実習時間の比率が多いためと考える。そのため病院実習においては、バイタルサインを中心としてフィジカルアセスメントを用いて観察を行っていることを今一度認識することと、保育所実習においても表情や皮膚状態、顔色などフィジカルアセスメントを意識して子どもの健康を捉えていく必要があると考える。

そして、学生は保育所実習である程度子どもには慣れていくが、病院実習では受け持ち制であり実習期間も短く、子どもおよび家族との関係作りと病状の変化に対する観察が中心になってくる。中村¹³⁾は、「学生は子ども・家族とのコミュニケーションが上手くとれないと中々看護者としての視点が広がらない」と述べている。このような背景をふまえていくと実習時間の減少に伴い、学生の対象者との関係作りの調整に重点を置いて実習指導を進めていくことが検討課題として挙がるだろう。

また、病院実習での健康問題では関連図を用いて身体面だけでなく社会面・精神面の問題も取り挙げおり、対象を統合して捉えていくようにしている。Shaver¹⁴⁾は「看護はばらばらの健康観をもつことなく、人間の健康現象を生物的・心理的・社会的に統合して理解すること」と述べている。このように子どもの健康を統合して捉えることと、健康時および健康障害にある時を含めて連続体でみていくことが、子どもの健康を認識するとき常に必要であることを強調して今後も実習指導を行っていきたい。

7. 結 論

- 1) 学生は、子どもの健康について健康の三側面から捉えているが、健康という言葉から身体面が中心で精神面・社会面が少ない傾向にある。
- 2) 学生は、健康な子どもを主体とする保育所実習、学校保健室実習により、「健康管理の方法」について学習しており、ヘルスプロモーションの観点から考えても重要な学びと言える。
- 3) 新カリキュラム後、本学では子どもの健康を育成する場の実習が多いため、健康状態に関する項目の中でもフィジカルアセスメントを活用した項目が少ない傾向にある。今後の課題として、病院実習での健康問題も含め、健康な子どもを育成する保育所実習においてもフィジカルアセスメントによる観察を意識して子どもの健康を捉えられるように実習指導を進めていく必要がある。

おわりに

今回、新カリキュラム後の小児看護学教育評価として学生が子どもの健康についてどのように捉えているか明らかになった。今後、実習時間の減少による課題を検討し効果的な小児看護学実習を指導していきたい。

本研究の一部は、日本小児看護学会第11回学術集会で報告した。

《引用文献》

- 1) 看護問題研究会監修：新訂看護教育カリキュラム—21世紀を担う看護職員の脂質の向上に向けて—、第一法規、32、1997.
- 2) 上山和子他：対象の健康レベルの違いによる小児看護学実習の評価と学習内容の構造化—病院実習と学校保健室実習の学習内容の検討—、第9回日本小児看護学会、56—57、1999.
- 3) 安田恵美子他：文献から見る小児看護学実習の現状と今後の課題、日本小児看護学会誌 Vol 8、No2. (通巻15号)、66—72、1999.
- 4) 後閑裕子・蛭名美智子編集：健康科学概論、廣川書店、4—16、1999.
- 5) 小西恵美子監訳：ペンダーヘルスプロモーション看護論、日本看護協会、33、1997.
- 6) 神戸大学発達科学部健康発達論研究会編：人間の発達と健康、大修館書店、9、2000.
- 7) 前掲書4)、20—21
- 8) Judith A. smith 著・都留春夫他訳：看護における健康の概念、医学書院、39—41、1997.
- 9) 前掲書4)、5
- 10) 田中哲郎編集：小児保健 I 子どもの健康管理、建帛社、3、1999.
- 11) 前掲書10)、3.
- 12) 前掲書1)、14
- 13) 仲村伸枝：看護学実習の問題解決と発展の試み—小児看護学、Quality Nursing Vol.7 No 3、43—46、2001
- 14) 前掲書5)、42

《参考文献》

- 1) 「看護教育」編集室編：新カリキュラムの改正の

- ポイント、医学書院、39-40、1996.
- 2) 藤岡完治／「看護教育」編集室編：新カリキュラム評価の視点と方法、医学書院、1996.
- 3) 「看護教育」編集室編：小児看護学カリキュラム案との展開、医学書院、1997.
- 4) 松浦和代・濱中喜代：小児看護の今後10年間の展望に関する調査、日本小児看護学会誌 Vol10、No 1、31-36、2001.
- 5) 石橋寿子他：看護学部学生健康概念に関する検討、入学時の健康イメージの因子分析、兵庫県立看護大学紀要 5、65-74、1998.
- 6) 石橋寿子他：看護部学生健康イメージ因子構造－入学時と入学半年後の比較と要因分析、兵庫県立看護大学紀要 6、99-109、1999.